『ゼロからの「資本論」』を読む

写真上は1月10日に第1刷発行された斎藤幸平さんによるNHK出版新書。下は2021年に発行されたNHKテキスト100分de名著『カ―ル・マルクス資本論』。「商品」に振り回される私たち、なぜ過労死はなくならないのか、イノベーションが「クソどうでもいい仕事」を生む!? 、〈コモン〉の再生―晩期マルクスのエコロジーとコミュニズム、というテーマで 4 回放送された。名著『資本論』を斎藤さんらしく、100 分で鋭く、現代的にわかりやすく解説していて、放送も好評のようであった 。

新書はこのテキストを底本とし,加筆・修正し、新たに書き下ろした章を加えたものである。新書の 3 章まではテキストと同じだが、第 4 章 緑の資本主義というおとぎ話、第 5 章 グッバイ・レーニン! 、第 6 章 コミュニズムが不可能だなんて誰が言った? が加わっている。テキスト自体が重厚だったが、新書では斎藤さんの主張がさらに具体的に展開されており、多くの人に読んでもらいたい。

あとがきで、斎藤さんは「本書は、『資本論』を使った、ひとつの問題提起です。だから、この本は入門書だけれども、資本主義批判としてだけでなく、コミュニズム論にもなっています。マルクスについての本は膨大な数があるのに、コミュニズムという視点から書かれた入門書がないことが、現在のマルクス主義や左派の低迷をもたらしていると思うからです」と述べている。

とくに印象に残ったところを抜粋して紹介したい。人間の労働という豊かな「富」を回復するためにマルクスが目指していたのは。構想と実行の分離を乗り越えて、労働における自律性を取り戻すこと。過酷な労働から解放されるだけでなく、やりがいのある、豊かで魅力的な労働を実現することです。

マルクスが思い描いていた将来社会は、「コモンの再生」にほかなりません。コモンに基づいた社会こそが、コミュニズムです。わかりやすく言えば、社会の「富」が「商品」として現れないように、みんなでシェアして、自治管理していく、平等で持続可能な定常型経済社会を晩年のマルクスは構想していたのです。

脱商品化を進めて〈コモン〉を増やし、労働者協同組合や労働組合によって私的労働を制限していく。そして、無限の経済成長を優先する社会から、人々のニーズを満たすための、使用価値を重視する社会へと転換するのです。 資本主義は格差や分断を生み、弱き者たちからさらに奪ってきました。そして、市場は貨幣なき者を排除します。だから、商品化の力を弱めて、人々が参加できる民主主義の領域を経済の領域にも広げようとマルクスは言います。それこそが、あらゆるものの「商品化」からあらゆるものの「コモン化」への大転換に向けた、コミュニズムの闘いなのです。

(2023 年 2 月 15 日)